

令和7年度 学校関係者評価書

鈴鹿市立石薬師小学校				
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
学力向上×ICT活用	<p>1 授業改善・学力向上</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>協働的な授業展開</li> <li>デジタル教科書や様々なアプリ、映像等を活用した授業で意欲向上、学び合いを推進する</li> <li>→アンケート「学習はわかりやすいですか。」</li> <li>積極的肯定割合 R6:58% → 60%</li> <li>→学調・みえスタ結果</li> <li>全教科県平均以上</li> </ul> <p>2 児童のChromebookを日常的に活用する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1年から6年まで学年に応じてスキルを身に付ける。</li> <li>→各クラス毎日1回以上端末を使用する。</li> </ul> <p>3 家庭学習の定着・学習ボランティアの活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>家庭学習の充実、自主学習指導</li> <li>→アンケート「家で宿題や勉強をしていますか。」</li> <li>積極的肯定割合 R6:79% → 全学年80%以上</li> <li>学習ボランティアの活用→学習ボランティア数と内容</li> </ul> <p>4 読書活動の活性化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学級文庫の充実 巡回指導員の活用</li> <li>→アンケート「読書は好きですか。」</li> <li>積極的肯定割合 R6:54% → 60%</li> </ul>	<p>1.アンケートから積極的肯定回答は55%と昨年度より-3pとなり、学校としてなお改善の余地があることが分かった。(参考:やや肯定を含めた肯定的回答95%)</p> <p>学調は県平均にわずかに及ばなかったものの領域によっては上回るものもあった。またみえスタは全教科で県平均を上回ることができた。</p> <p>2.端末の全クラスほぼ毎日の使用や、学年に応じた学習アプリの効果的な活用により、子どもたち個々のICT活用能力は日々向上していると感じる。</p> <p>3.積極的肯定が85%と昨年度より大きく上回ることができた。学校の学びを家庭につなげ、宿題の丸付けを保護者に依頼したことなど家庭の自主性や意識向上につなげることができた。</p> <p>4.積極的肯定が47%と昨年度より-7pとなった。年々、子どもたちの端末やスマホ、テレビの視聴時間が増えており、読書の時間や関心が薄れていると感じる。</p>	<p>1.目標数値に達しなかったことへの改善対策は必要だが、デジタル教科書や様々なアプリ等を活用した取組を通して、子どもたちが学ぶことを楽しみ、意欲を高めている様子が感じられる。</p> <p>2.授業参観を通して、子どもたちの端末への慣れが窺え、毎日継続した取組の成果を感じる。端末に目が向き、先生と子どもの視線が合わなくなることで授業全体の一体感が薄れてしまう場面がある。また、慣れに伴い端末の扱いが難に感じる。</p> <p>3.家庭学習の定着を図るうえで保護者が子どもの学習の様子や関心を持つことが重要であり、その一環として保護者に丸付けをもらう取組は有効だと感じる。</p> <p>4.巡回指導員の有効活用や、読み聞かせボランティアの方々の成果が窺える。読書離れは、当校だけの課題ではなく、社会全体で取り組んでいく必要性を感じる。</p>	<p>1.引き続き授業改善を積み重ねながら学力の定着を目指していく。次年度から児童端末が一斉に更新されることに合わせて、さらにさまざまなアプリ等を精査し、充実した活用を研究していきたい。</p> <p>2.タイピングやGoogleアプリ等を活用しスキルの向上を図っていく。デジタルだけでなく、アナログの利点も活かしながら両輪で学力の向上に努めていきたい。</p> <p>3.今後も学校だけでなく、家庭とも協力して家庭学習の習慣をつけていきたい。</p> <p>4.読み聞かせボランティアの方々による読み聞かせの様子を見ているも、本の好きな子が多いと実感している。引き続き、授業における図書館の活用や図書館巡回指導員との連携を通して、読書活動に一層努めていきたい。</p>
長欠防止対策	<p>【不登校の未然防止】</p> <p>1 安心して過ごせる学校環境づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>気軽に相談できる雰囲気作りや、教室内の環境整備</li> <li>→アンケート「学校に行くのは楽しいですか」</li> <li>積極的肯定割合 R6:55% → 60%</li> </ul> <p>2 SCや相談機関とつなげてきめ細かな支援を行う</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>スクールカウンセラーを活用した児童支援</li> <li>→30日以上不登校人数 0人を目指す</li> </ul> <p>【いじめの未然防止】</p> <p>1 良好な人間関係を築くための支援を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>他者理解の促進</li> <li>→アンケート「友だちに思いやりの気持ちをもっていますか」</li> <li>積極的肯定割合 R6:71% → 75%</li> </ul> <p>2 いじめをなくそうとする気持ちを育む。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>いじめ防止の意識の向上</li> <li>→アンケート「いじめをなくそうとしていますか。」</li> <li>積極的肯定割合 R6:73% → 75%以上</li> </ul>	<p>1.積極的肯定55%(±0)という結果であった。在校児童に新たな不登校はなく、どの児童も安心して過ごせていると考える。</p> <p>2.スクールカウンセラーの活用により登校しづらい児童が登校できている。一方、前学校で不登校だった児童が本校転入後も登校できていないケースもあり、0を目指すのは難しい状況であった。</p> <p>1.積極的肯定は68%と昨年度より-7pとなり、学校としてなお改善の余地があることが分かった。(参考:やや肯定を含めた肯定的回答96%)</p> <p>2.積極的肯定は73%(±0)であった。些細なサインも見逃さず、早期発見に努めたことで、いじめ事案において重大化することはなかった。</p>	<p>1.不登校児童がいないことは素晴らしいと感じる。引き続きどんな些細なことでも話せる環境を整えていってほしい。一方、「学校に行くのは楽しいですか」の積極的肯定が減っていることへの対策をお願いしたい。</p> <p>2.様々なケースがあり、指標に無理かあると感じる。</p> <p>1.数値的には残念な結果であったが、授業参観等を通じて、子どもたちから思いやりの気持ちが伝わってくる。授業で取り組んだ内容をこれまで以上に保護者へ共有する方法を考えてほしい。</p> <p>2.先生方が熱心に子どもたちのトラブル等に対応してきた成果を感じる。いじめが社会問題となっている中、早期発見や重大化しないよう、家庭での取組や学校と家庭との協働が一層必要と感じる。</p>	<p>1.引き続き安心して過ごせる学校環境づくりに取り組むとともに、学校に行くのは楽しくないとしている理由を丁寧に分析し、教職員間で共有し合っていきたい。</p> <p>2.既存の登校しづらい児童に対し、今のペースで支援を続け、少しでも授業の参加率を上げていきたい。転入児童の不登校ケースについてもまずは部分登校が実現するよう働きかけていきたい。</p> <p>1.引き続き道徳の時間を基盤にした指導の充実を図るとともに、日常の諸事案に即した適時の指導を通して他者への思いやりや配慮を意識化させていきたい。</p> <p>2.定期的ないじめアンケートの実施を早期発見の端緒とし、計画的な指導を通じて「いじめは許さない」という意識の定着を図っていきたい。</p>
地域連携	<p>1 「信綱カリキュラム」の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>朝の朗唱をボランティア活用</li> <li>→短歌づくりを全学年で行う</li> </ul> <p>2 地域学習・キャリア教育</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>→地域人材の活用、石明協と連携したボランティア活用</li> </ul>	<p>1.毎週火曜日の朗唱が継続でき、短歌づくりも定期的に行うことができた。</p> <p>鈴鹿市文芸賞や顕彰会歌会において、多数入選することができた。(朗唱回数…34回/年)</p> <p>2.毎週水曜日の朝の読み聞かせや各学年の町たんけん、高学年の裁縫学習など多くのボランティアの方々の協力を得ながら学習を進めることができた。(読み聞かせ回数…34回/年)</p>	<p>1.ボランティアを有効に活用していると感じる。引き続きボランティアと協力して子どもたちの学びを豊かにしていってほしい。さらにボランティア登録者数が増えるとなお良い。</p> <p>2.平素から地域連携活動は大変良くできていると感じる。地域性を活かした当校の特長であり、今後も継続していってほしい。</p> <p>子どもたちが、もう少し積極的に地域行事に参加してほしい。</p>	<p>1.朗唱や短歌の魅力と成果を積極的に発信し、ボランティア登録者数増加につなげていくとともに、ボランティアと子ども双方の交流を通じて、子どもの主体的な学びを目指したい。</p> <p>2.地域行事と授業を結びつけた学習や、子ども向けの地域行事案内の充実を図ることなどを通じて、子どもたちが地域活動に参加しやすい環境を整えていく。</p>
非認知能力育成	<p>1 研修主題に非認知能力の育成を掲げる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「やりぬく力」に重点を置いた授業展開を工夫する</li> <li>小中連携で進めるPMC法による発達段階に応じた非認知能力の育成</li> </ul> <p>2 「ほめて伸ばす」を意識した取組の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自己肯定感を高める</li> <li>→アンケート「自分にはよいところがあると思いますか。」</li> <li>積極的肯定割合 R6:64% → 70%以上</li> </ul>	<p>1.「やりぬく力」に関するアンケートでは肯定的が82.5%(+5p)と昨年度を上回り、一定の成果を得ることができた。</p> <p>2.積極的肯定は59%と昨年度より-5pとなったが、やや肯定を含めた肯定的回答は89%と高水準であった。引き続き授業だけでなく学校行事や学校生活の中においても積極的に自己肯定感を育てていく取組が必要だと感じる。</p>	<p>1.授業や日々の活動に加え、外部講師を招いて話を聞くなど、様々な取組が行われたことの結果だと感じる。「非認知能力を豊かにする絵本」等の図書も活用しながら、引き続き取り組んでいってほしい。</p> <p>2.目標数値に届かなかった現状を受け止めつつ、難しさはあるが、学校生活の中で「ほめて伸ばす」姿勢をより積極的に実践していってほしい。宿題等の提出物に先生からの一言があると、やる気につながると感じる。</p>	<p>1.本校の課題を踏まえ、「やりぬく力」以外の非認知能力にも重点を置いて取り組んでいきたい。ポジティブメッセージカードや図書活用、振り返り活動など効果的であった実践を継続しながら、学校全体で効果的な授業づくりに取り組んでいく。</p> <p>2.子どもの良さや努力を認める「ほめて伸ばす指導」を一層充実させていく必要があると実感している。今後、教職員全体で具体策を追究し、組織的な指導力の向上を図ってきたい。</p>
人権教育・特別支援教育	<p>1 人権教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>児童理解のレポート研修、全体研修会</li> <li>人権教育の推進、全校児童の人権意識の向上</li> <li>→アンケートで検証</li> </ul> <p>2 多様性を認め合う教育</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>特別支援教育の研修、特別支援学級・通級指導教室公開</li> <li>多文化共生教育 →多文化共生の授業を年1回以上実施</li> </ul>	<p>1.日々の授業における人権教育の取組やトラブルがあった際の丁寧な対応により、子どもたちの人権意識が育ちつつあった。</p> <p>(参考:やや肯定を含めた肯定的回答96%)</p> <p>課題として、子どもたちの聴く姿勢の定着やSNS等ネットモラルの低さが見られた。</p> <p>2.人権ポスターや人権短歌に全学年で取り組んだことで、友だちと仲良く過ごすことの大切さ、楽しさを実感する児童が増えてきた。(参考:やや肯定を含めた肯定的回答98%)</p>	<p>1.人権教育は机上学習だけではなく、実生活の中で学び育てていくものと考えられ、引き続き根気強く取り組んでいってほしい。</p> <p>2.今後ますます多文化共生の社会が進む中、子どもたちには必要な力と考える。また、個々のネットリテラシーが問われる中、学校だけでなく家庭の理解や協力、啓発が不可欠と感じる。</p>	<p>1.全ての教育活動の根底に、人権教育があるという意識を教職員が常に持ち、日々、言葉の使い方や聴き方などに注意しながら指導していく。</p> <p>2.多文化共生、ジェンダーなど様々な人権課題に対し、発達段階および子どもの実態に応じた取組を進めていきたい。また、ネットモラルの学習を低学年から生活指導と連携し、系統的に取り組んでいきたい。</p>
教職員の働き方改革	<p>1 会議の時間短縮</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>PC利用促進</li> <li>→60分以内に終了する会議の割合 R6:74%→80%以上</li> </ul> <p>2 時間外労働時間の短縮</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>定時退校日の設定 スクールサポートスタッフの有効活用</li> <li>→時間外労働時間 昨年度比-10%を目指す (R6月平均27.1時間)</li> </ul> <p>3 休暇取得日数</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>→一人あたりの月休取得平均日数 R6:1.3→1.5</li> </ul>	<p>1 勤務実績集計から、R7は59%と昨年度より-15pとなり、目標値からは大きく下回った。今年度は研究発表や職員会の欠員が生じるなど議事が多くあったことで、協議に時間を要したことが要因にあげられる。</p> <p>2 R7は昨年度より-3%と、目標の10%減には満たなかったが、改善方向にあった。</p> <p>3 R7は1.2と昨年度より-0.1となり、なお改善の余地があることが分かった。</p>	<p>1.研究発表会を参観し、改めて、先生方の苦労や大変さを知ることができた。日々子どもたちへの指導に感謝している。</p> <p>1.2.3.を総じて、「教職員の働き方改革」は、全体の取り組みの見本となる大切な項目と考える。次年度に向けて、引き続き効果的な取組をお願いする。</p>	<p>1.PC利用促進だけに頼るのではなく、担当者会議や企画委員会など事前準備と協議内容の充実を一層図ってほしい。</p> <p>2.特定の教職員に業務負担が集中しないよう、組織全体でバランスの取れた校務分掌体制を構築していく。</p> <p>3.年休に加え、多様な特休制度も視野に入れた柔軟な目標設定に改めたい。また、全ての教職員が気兼ねなく休暇を享受できる風土を醸成していきたい。</p>